

洞爺湖温泉町地区

(北海道虻田町) 第1回まち交大賞 創意工夫大賞

計画期間 平成16年～18年
面積 84ha
交付対象事業費 718百万円
市人口 8,352人(地区内人口 1,590人)

ポイント 有珠山噴火被害からの復興を経て、火山と共生し、誰もが気楽に楽しめる温泉町づくり

地区概要 広場整備等の基幹事業と一体的に宿泊客がまちなかを散策できる仕組みを整備することにより、誰もが気軽に楽しめる温泉町づくりを実現し、まちなかの賑わいの再生を図る。

目標 賑わいの再生を大目標に掲げ、かつての温泉街の活気を再生し、観光振興を図る。

指標 火山遺構散策広場整備等を行うことにより、散策路の利用者数増を図り、温泉街の賑わいの再生や火山学習をテーマとした滞在型観光の拠点づくりにつなげたいとの考えから指標を設定した。

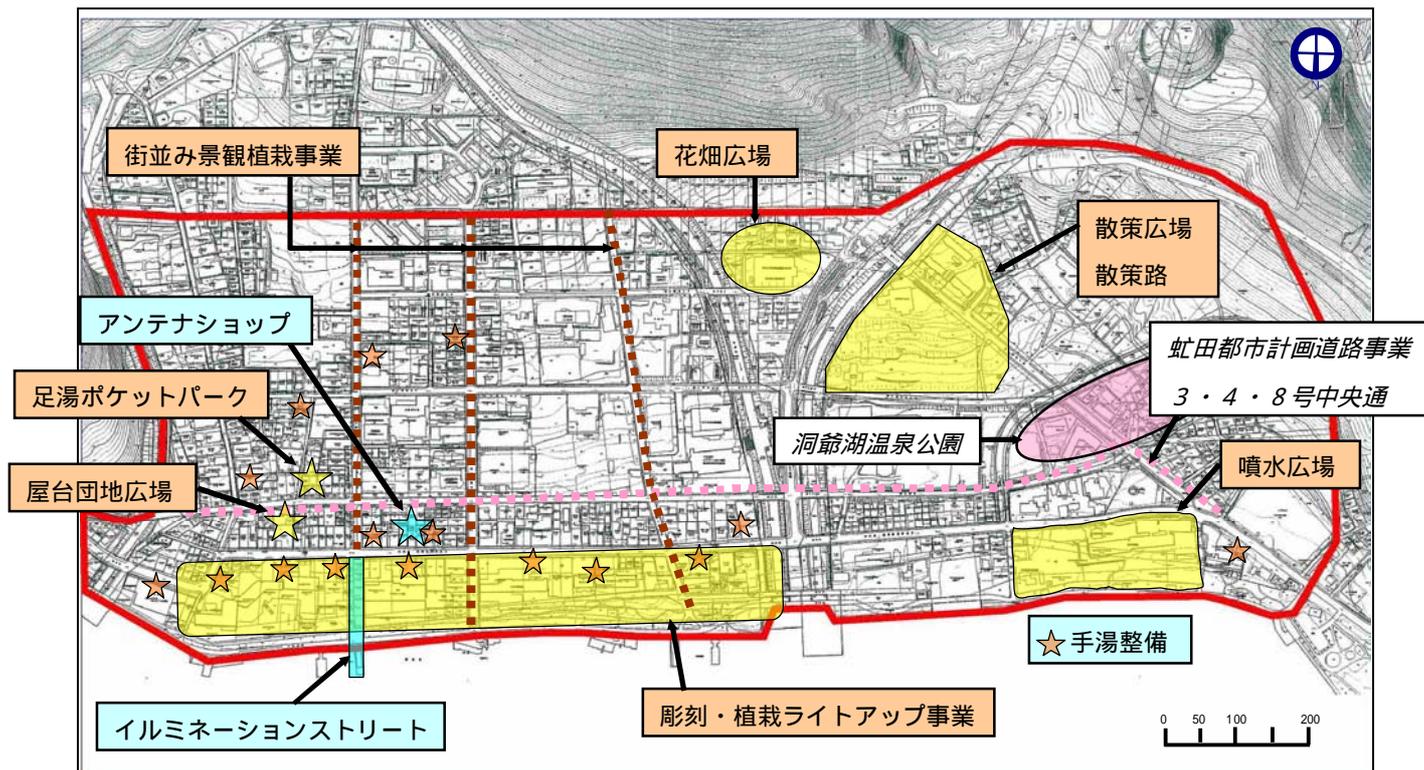
観光客入込み数	3,260,000人 (H14)	3,550,000人 (H18)
散策路の利用者数	435,000人 (H15)	450,000人 (H18)
宿泊者数	690,000人 (H14)	720,000人 (H18)

事業内容 基幹事業 (648百万円)

足湯ポケットパーク (1カ所、345㎡)、花畑広場 (1カ所、3,000㎡)、散策広場 (1カ所、600㎡)、散策路 (500m)、屋台団地広場 (1カ所、1,040㎡)、噴水広場 (1カ所、17,350㎡)、彫刻・手湯・植栽ライトアップ (13カ所)、植栽 (高木1,120本、地類植栽2,720㎡)

提案事業 (70百万円)

イルミネーションストリート (1カ所、11基)、手湯整備 (11カ所)、屋台団地広場整備 (1棟5戸×2棟)、アンテナショップ整備 (1店舗)



地区の現況と課題

現況

洞爺湖温泉町は、北海道でも有数の温泉街であり、有珠山噴火前は年間 355 万人の観光客が訪れていた。しかし、2000 年の有珠山噴火により、インフラ及び温泉街施設等に甚大な被害を受け、観光客が減少し、温泉街は衰退した。

課題

- ・温泉商店街の賑わいを取り戻し、観光業の再生が必要。
- ・火山観光施設の活用による火山と共生した観光地づくりを進めることが必要。
- ・観光資源の見直しを行い、観光客から見て魅力あるまちづくりを進めていくことが必要。

提案事業の特徴

手湯の設置

まちを歩いている人が湯煙を感じる中を快適に歩いてもらうため、足湯ポケットパークの整備とともに提案事業で手湯をホテルや旅館の前に設置。維持管理は各ホテルが行っている。

夜間照明の設置とイベントの開催

温泉街から洞爺湖へ向かう通りをイルミネーションストリートとして照明施設を整備。この通りをメイン会場にし、イベントを開催する。

屋台を活用した賑わい創出

広場に屋台を建設し、民間に賃貸し、屋台団地広場として整備する。

計画策定プロセス

ワークショップの開催

商工会、観光協会理事会、飲食店組合、まちづくり推進協議会とワークショップを重ね、都市再生整備計画を策定した。

アンケートの実施

事前に実施した事業賛否のアンケートでは、約 8 割の賛成を得ている。

地域の声を反映

観光協会やNPO法人から受けた「洞爺湖温泉街にぎわい構想」等の提言にある「にぎわいショップの開店」や「イベント開催」等の活動を支える事業を選定し、計画を立案した。

洞爺湖町長長崎良夫氏のコメント

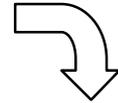
2000 年有珠山が噴火し、噴火後の街並みは閉鎖店舗や空き地が目立ち、活気が乏しい状況にあり、既存商店は急減した消費人口に不安を抱いていました。

今後は、災害に強いまちづくりを進めるとともに、「火山」という地域資源を生かした新たな観光への取り組みが求められています。

観光消費が望めない状況下ではありますが「温泉らしさ」や「癒し」の風情を醸成した、温泉情緒豊かな街並み整備を基本としています。



シャッターが閉まっていた店舗をアンテナショップとして再生



気軽に立ち寄れる手湯



賑わう足湯ポケットパーク



イルミネーションストリートの様子

火山と共生した観光地づくりを目標に掲げ、温泉街の賑わいの再生やテーマとした滞在型観光の拠点作りにつなげるため、各産業団体と話し合いながら整備しています。